

✕  
i 93

因證辨

附

古方後世  
兩醫論

合本

490.4

Im-2

No. 2188  
181 93



富士川文庫  
644

不やしの

因澄辨は波七

穿らの袴うでハ

々々ませんこのはま

はぶふかこのので

々々まごころえさるんが

まのんはげで

えらんまのいさふ

こころ入ま

いざはまむで々々ま

只ちりららの病人の

あそらくこの漢海で

々々まがあらわじせらるんが

々々まごころえさるんが



厚く

いん

中

いん

いん

々々ま

いん

いん

々々ま



傷寒病小えきの後論も美小えきの  
空まで感むでケルキヤける  
服てえや〜

古方後世両国通

いさきおあ〜  
中く面白くてケルキ

「イヤ中々べのい客あ〜  
アノモ十助源流記と持てあ〜  
坊々の人いさ〜あ〜人であ〜  
アハ〜あ〜あ〜あ〜

実天下一品の書〜  
アノあ方山の  
あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜  
あ〜あ〜あ〜



いさあ〜  
いさあ〜

エマケ  
マニマでケルキ  
先オ一の  
あ〜あ〜  
あ〜あ〜  
あ〜あ〜  
あ〜あ〜

因證辨



一 凡時候病小外感内傷半輕重の二ツ有之

外感皮膚目の病にて一が貴行ては遠内傷

傷を乃邪内感或内損と云て貴〜あ〜

若得て是と發汗を以て布ては邪と増

長せり病臟腑不陷て大小も重小感ん

一 今彼外國の如き辨邪見と云は行〜

先年朱の如き漢丹商如〜  
冒を傷冷

カテ大湯皮膚の邪故一度發汗して治を  
今此當子の吳起の女に軍に舟被りて  
邪をこらぬ蓮肉港へ入るも毒し又人際  
見脈脈直中<sup>スナナ</sup>カテ發汗の能く治る  
症あるは若くして是と云ふ及ゆ汗を  
毒汗と云ふは此病の多しといふ言易  
ふて治の壞病ともも難なり

一内外陰實の汗吐下の治法も亦治を

今此も是れ微少の皮膚の瘡治方カテ治る  
内陰實を以て皮膚多し後實あるは人を  
可治の才也是牙と大切なる者古方の治法  
不用の湯合ありて是去古方家の名醫也  
老練の妙なり心勝の如く汗下と治る  
初て世務不れは人少壯を弱して  
内陰又實あるは汗下を早治温して  
名醫先牛も又千慮の一失ありては  
攻



撃とせし且法方民の數多死せし中と哀愁  
より起りてな先づ板のはれ方と投至る病  
の動靜と遠近豫防說補益術を考  
とらむに生員の大幸なりと云ふ

一 丈波出、白雲の東海小津を遙ふみ千余  
里の波濤と隔る大近來新造の仕舟にて  
ささや小弛ささや十八日をたかりて白雲に  
もつ舟にせし 白雲のる火直中の傷をふ

して良きれも船内港小をらせし却咽喉を  
衝小く復令内損せし其咽喉の人身飲食の道  
少て是と因塞る中実小 白雲の大甚せき易小  
冒寒傷冷毒一極小を瘧て治と施す内と療  
治遠く成て生と危くさへ

一 亦汗下出てせし小直の収むるえりり病の  
根本治きれ後の是尚以て候し今敵兵十  
ふち破て直の候は得るたまより十七年

十艘其艘と漂来と云ふ方毎は海家の動乱或は海  
或は内港小走へ府城と漂来と云ふ中或は中  
糸原泊して西小中北東の通船と漂隔刻  
公家大治の比と掠奪と云ふ事と云ふ事と  
海の丸今更へ中へ波と漂来との比と云  
る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
其外心への秘蔵と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
皇軍の地方へ上陸と云ふ事と云ふ事と云ふ事

此の今更へ中へ波と漂来との比と云  
通船と漂隔刻 内港と漂来との比と云  
病の比と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
初汗下出て一旦の世を云ふ事と云ふ事と云ふ事  
汗下の果腹眩と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
更へ中へ中へ中へ中へ中へ中へ中へ中へ中へ

一 叔又長病と成てけり月海家の漂来と云ふ事  
厭いと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



之取方と併せて清血の英爽と相睦せし  
一勝手銭袋の牛でカキカキ常ノ所ニ所ニ是れ雄  
雄と改せし心と事治するもくし見揚る湯  
其新湯と用ひ場今もく治療の上にも好ま  
らざるの瘡あるもくし

一今や小まじぬと云はる何と云ふは焼あり  
白土十部の勝利と云く一旦を病支金あり  
病患根えとの治るは心も治るが遺腹

一抑はく内証は伏匿して常小癩病の心を  
うつりし又や散らるるづもして幸聞そを  
一可先けし母公の貝有るは丈夫あり今も  
病同と考へる病情と遠く公の病方と云ふ  
一内外と相解して血を流通して邪を身と  
消散する所わく不病の根え近き法と  
一の法は去るもくし

一之邪の去るは車るか否は保瘴して多し

近津小波神流りても、  
折小太夫小夕構へて、  
豫防説小妻と

一 土周心小疑深く、  
世定かりて、  
尚小舟

一 折後世者流の條、  
者を、  
長崎と

中の中が、  
白雲小舟の、  
便利毎、





補養劑と興隆令作潤燥と省くの外波は好小  
 仁貿易才小法心石法は山出場不穀水  
 勿綿漆蠟和紙於綿布糸綿より米穀小  
 夏系煙子鶏承臭物海系出進ゆきま  
 年と比たそ在るその斗りと多分はと出四  
 脈固結の弱ふ不感給文とに正十分は貿易は  
 波をて 皇家の南海と年漢よりそ是を  
 の湖より海軍の要患減少をたるる  
 ともて

皇山平六の西の法士より十々 夫は地年が成  
 ろ心打ちて治くむた方、勿綿の中海軍系  
 法方系精、防禦の位地とす、中調練とま  
 くの法、縁防、況、出、て、調理も、所、は、合、く  
 後、世、家の、香、種、教、多、々、種、飲、水、の、女、性、を、菜  
 菜、進、く、気、血、と、煩、燥、一、外、皮、膚、小、方、の、以  
 獲、教、内、臟、腑、小、入、え、と、ま、の、と、わ、解、き、と  
 同、時、り、て、是、と、減、小、不、誤、治、上、の、療、治、と



ト金とよまはじ

一 海岸防禦の後并ね有る一は口の港に峽  
と西岸より 大炮のすゝ届くは埋まると  
才とてばし何社の坊御系を大軍艦數艘は  
亦今も本物か内小連御を付は炮を針を江  
戸中深動は目のちこるあやしくなはる止 江城  
皇室の法度の後庭と初メ法士の妻を今令の  
比一ちの人の心ふ動はは方の思はけは城の内

動乱を討外兵とては南牆の口を牛と  
なはる法術画候に成候一はの五考尚豫  
防説補差測小於く明辨は

一 茶市洋貿易の好小 皇室に米穀運持す  
小役利をき位の小なき業を元船と數艘中  
志成り小波を新造の旅館とせ方の晴は  
格せ方と造きいりしとくは又大小役利小  
一 書成りし尚委數豫防説お出

一 前も如く兵部書成て仲小長に源伯印を討  
 先ず八丈海大船共掠奪進路を我が取りしむるも  
 同船も所不あり我軍より討つ大船ももせ方々  
 舟船を奪へ地も成るかくし是は源伯印先  
 幸所へ人制するの場少くもそを久し皇軍の制  
 成るは汝も舟船も中へを奪るも所は今又  
 通商の小事にして兩年の事と成せ幸平の生  
 死も多く毀傷も多し源伯印は憐れむ身皇軍の

孤嶋へ狼伯印を討つと相尋ふ國法立民を死

の國法もあつて有威不伐の名を坤輿へし斬る

取めて実ハ何國大利を奉て彼を討て南海の

右清も多ししとて今より七合元軍の皇軍を討

如くたつてめも國を安んずるの斗策とん

一 皇國も知るに源伯印も奪るも其ののりもそ

罪波少くも一併に討つ者源伯印も其のし上陸がて

民も其の討つに家紋米穀養育の制威死の

婦女也



奸淫をくわへしむる中彼も罪をての是れ有る  
業今よりして後其は國法より年いよ今も  
害も深きもの業、其拂のゆゑんをいふ事にて  
此の防索は是れ十倍して嚴き小ををて  
此て尚も是れ其の件も豫に防況補を術を安ん

附録 疑似わが条

一 凡環海の國も凡俗を多し言はれども  
仁義礼智の道孝悌忠信の教をいふ小國

一 其の治は是れ一家仁にして小興仁一家  
讓にして小興讓一人貪戾にして小興亂一  
國多事のいふ者今も治は和政治も其を  
官位をさしつゝ其をさしつゝ其をさしつゝ  
殊更に當りては其を政を現道と徳を以て  
其小をさしつゝ其をさしつゝ其をさしつゝ  
相持も其をさしつゝ其をさしつゝ其をさしつゝ  
讓りも其をさしつゝ其をさしつゝ其をさしつゝ

撰びてははに年かて又學人をしてはと懐元の大  
政官の庶人と成る民同小安邊に居るは是を  
とて政とて言ふ事なきは其の何れ中にも  
今を假令相將するものも其對するは向政中  
何れせん心なき若くは遊海等の城を名に信て  
用る又一方の相將の自己の事にして書物に據  
自分便り行て事なきは其の便者の語と  
る中周との言と通るの事なきは不礼なきの事なき

是疑川の病をして疑わす有るは是を陳い

一 彼を格小有るの源流今の皇家の地を半杯

少死を中と憐むる事なき言聊に不似るは

伊予の地はに源流に相令不死者若くは星かて

或る人々今人々を言ひしは其の軍軍也其

相争ふは我の皇家の令其の士民金城を充満

一 此の由なるは其の事なきは其の事なきは

巨万の生員撫り其の事なきは其の事なきは



其天孫降臨もや妙人子以是名はたきまの才也

一 彼も南洋の地にのそは新水令島の彼利小直りて

白米と其のは法破平とをり六彼利小直りて

和して義と美りむ荀か共共和政治州の君

長と者別の對し説へきの言小邪すと書美を

破るはたきまを二つに

一 彼も之新と政はも各も政治を亦破り

流るるも對し彼り人の國法と測傍とを

予言礼と知は是もたきまを二つに

一 彼も之の事月ひるは内年大軍艦と較

多事りつて國争小多とりふ人をも智の言

りて一彼も今も年用ひく山も並え光と中て

用いらさきまも有へり又も之目も自慢せん

とて大軍艦と其は亦引出と以邪に小邪

美も出り別建るともまも言へるも控とを

も言ふる一海軍とてフレガットと書小邪

移る人々や婦女童輩と威はさるの位に  
おぼしき事なきにあらざるや

一 波打島の豊島ありては始り人の島の成りては  
支那の心よりやうやくる人々の當りては  
坤輿中にして同盟の人出也とて國政賢  
令と候王うに今年ありて又此の賢人位を讓りて  
民間不安遣さる也人徒家らんを以て王を  
奉りてんや又もとて成るも信らんを以て

一月もそ大いとはへんや今を以てはさるの  
書物よりしるの今ん玉の基律少法律いえ  
て個の人民に戒と下り他邦の民教法は好む  
得るもいと民人少くも皇國の教法政治は  
さるもふ厳格なるもの今ももも皇國の  
皇世よりて義者友の法礼興發せしむ人  
えんを實する通のふ印蘭直傳の事不  
い若くは將己のねきりて今波がこふ事





通商を以て 皇軍をして信ずる事なきは 何れ  
皇軍 國と持てしむらんや 又信て皇軍  
の如く 今皇軍の即 國軍にほむるを 何れ  
十の兵にして 八の兵にせん 是れ 皇軍の  
一 皇軍の如く 皇軍の如く 十の兵にして 皇軍  
斗策を以て 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍  
九の兵にして 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍  
七の兵にして 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍

魯西亞アメリカ等の本小艇の使事しる中  
並の通商容易なる近き中 皇軍の如く 皇軍の如く  
小艇の如く 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍の如く  
多の兵にして 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍の如く  
皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍の如く 皇軍の如く

孫子謀攻篇曰 用兵之法 十則圍之 五則攻之  
倍則分之 是唯非言 用兵之寡衆 多已寡衆  
反復先考 敵之強弱 与虚実 再省吾之時



与利与人情可<sub>レ</sub>否<sub>レ</sub>明察彼我分<sub>レ</sub>而後動  
兵言也今國家失主當<sub>レ</sub>哀<sub>レ</sub>勸<sub>レ</sub>之時心不  
振防御示又未可<sub>レ</sub>救時与利皆不可也 是夫兵  
者兵器也 不可<sub>レ</sub>輕用 兵錯而不<sub>レ</sub>用 應是用  
兵緇奧也 諺有之曰 讀<sub>レ</sub>孫吳之書 而不<sub>レ</sub>嗜  
殺人者 仁人也 聖賢又曰 仁者無<sub>レ</sub>敵 是兵  
不可<sub>レ</sub>敵 仁之言也 又曰 仁愛<sub>レ</sub>之理 心德<sub>レ</sub>我  
愛<sub>レ</sub>民之德 以<sub>レ</sub>愛<sub>レ</sub>民之德 通<sub>レ</sub>彼愛友之情

彼豈敢得<sub>レ</sub>以不仁而敵之乎 今以<sub>レ</sub>通信商  
之故 輕動<sub>レ</sub>兵者 是不得<sub>レ</sub>林示<sub>レ</sub>通信通商之本  
意者 否<sub>レ</sub>又匹夫之勇 一旦之怒 忘<sub>レ</sub>其身<sub>レ</sub>者 与  
君子不可<sub>レ</sub>必為<sub>レ</sub>其事也 皇天又豈能快用<sub>レ</sub>  
環海三國 尚可<sub>レ</sub>服

嘉永六年 癸卯年 種九月

草芽庵 函

高村隆圓 拜上





入床の食傷いしやうの中なかとみ治いん海かい天てん慶けい病びやうの田でん原げん  
秀い々で々きの醫い師しやのしさて平へい治ちしし又  
解かい後ご案あんより保ほうえ湯たうや矢や治ち飲いんなど用もちつ  
小こ及およてふ月げつの重じゆうれ症しやうありしし毒どく水すい元げん磨ま  
文ぶん治ち建けん久きうふじり醫い師しふふききららううままううせせらられ  
後ごふ南なん症しやう少せう症しやうとあり平へい金きん一いつてし令れい使し少せう  
ははひひこのけけと南なん本ほん庵あんととりりふふ名な匠じゆうととくく

ままるるししままのの瘡そう治ち少せうと治ちせせに室しつ所じよ等とう  
持もち流りゅうより御ご殿てん匠じゆうがが手て扱かくふふららううとと後ご  
東とう山さん遊ゆう女にょのの玉ぎよくをを手て扱かくふふららううとと後ご  
命いのちも危あやく減へん流りゅう術じゆつ調てう疾しやくのの出しゅつりりわわららううか  
治ちええききししももええひひと支し體たいのの足あしこれ  
一いつ夜やののみみかかややみみとと二に十じゆにに心しん方ほう糸いと敷しきりりか  
ららううととななややとと一いつ夜やにに保ほうええ湯たう仕し美みの  
寺てらのの糸いと和わ漢かん七しち人にんとと其そののの仲ちゆう景けい小せう扁へん鹊かくし





又早年と経る法は一象示る腹水  
腹水とけしむの法も少くもさう  
是と今も病と入り  
より病の軽重やあつらふ病と入り  
兼て多くみかざる腹邪もこのん少も  
たえんといふ人一法あり  
病の多し法方経路のむら一法念の以

蒙古具厥より至病多し外邪の重きにして元  
醫の多しより一北條時宗より良醫れ  
法術一々もさるる業もて神凡湯といふ  
方少して一にて下り小くこゝ暴吐暴瀉して注  
つたるとし今使はらう依て今も名醫浮海  
して各醫案を汲り中小業名梅庵といふ  
醫者れ古方後世と折衷し補瀉を兼る

観測の三つは方と見ゆ平言法通をよとて  
くも補注の二つをわと温補小のくさる  
攻戦手より外かきし後世の論小曰下度この  
人六陽玉感の性質ありて後世ありとへと  
年多むしたにき傷小さるるくふ生れ  
あり若のわらだ小のくさるこのわらどへ文度  
川法ていたまのわらど布て糞とわらどへ

先く病をかむらく夫茂仁義 音通小て補はん

但今期と候まへく抱の後世家花崎軒

花本意居室玄長尾尾を揚中兼尾本意居室玄長尾尾を揚中兼

解なるの殿子御達候く又古方家の方小水素戸

良薫徳本御殿伏候別抄等あり是亦の大

医否くこれ穢命と失人攻戦一瘦物と推

すんご自然邪氣脾胃腎小浸淫一膏育の座小



五つて治一がく入日内攻のちま川を  
しゆに連下利と及函に掛よるこ  
の誤海なきびとく古き業の素人  
不問よりやろし世家の初らうと成らるる  
人信あしとくも病人色仕美の性所  
たれどもいふも過る支体も衰弱れかた疲  
心をもつる小劑も用いらるる  
たれどもいふも過る支体も衰弱れかた疲

一休神心健まじやふる小ヤびづく丸カも多うりて

ちまこ果郎と輕も掛ぶがようらんところ

せむお邦の近しいなかとらまはしあ衰弱

をらふ小同をつまざらしくさしはあふ女病

みしてまらふやせもまらまら只海子人

武士たす念ス世末はあまやちねいほあはれ

かち中つらふの境も此海子人

あつた場合の形勢とついでに度量  
と斗らば大きくなる事をも知らねば  
金をえとびていふもの境して後物  
をばしらりしつゝ神仏不測の一人の名醫と  
生ぜんまこの秘法治しむる事  
穴物小匠師の論と次の同くせしむる事  
中二古方家の論小治らんせんといふこと  
元長の議くハ一士の議くハ小治んぐハ津川市

退方衰弱疲弊してこの二府小くして水  
素戸良草薫んといふことを良草薫の国  
論と銘しむる願ふ経法の志と成就せしむる  
美を以て其の良草薫日この事を出て後方の物と  
後世業この以て銘したるを本文弱と  
りよもの物役して志ちり身切療法しむる  
又弱とえりし大物と願ふやどの人物を  
さしむるにむるけ入病人のふた利



今も抄も抄も七七の系にありて教判かきつるや  
平胃散の虚弱牛入る自以済する條法也  
變法あり  
せんとく、<sup>ん</sup>、<sup>の</sup>、<sup>人</sup>、<sup>青</sup>、<sup>沙</sup>、<sup>湯</sup>、<sup>か</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>し</sup>、<sup>用</sup>、<sup>い</sup>、<sup>る</sup>  
功、<sup>速</sup>、<sup>し</sup>、<sup>る</sup>、<sup>に</sup>、<sup>や</sup>、<sup>り</sup>、<sup>ち</sup>、<sup>り</sup>、<sup>を</sup>、<sup>し</sup>、<sup>に</sup>、<sup>攻</sup>、<sup>撃</sup>、<sup>手</sup>、<sup>劑</sup>、<sup>と</sup>  
采、<sup>り</sup>、<sup>て</sup>、<sup>聖</sup>、<sup>の</sup>、<sup>條</sup>、<sup>方</sup>、<sup>を</sup>、<sup>甚</sup>、<sup>し</sup>、<sup>く</sup>、<sup>廟</sup>、<sup>堂</sup>、<sup>を</sup>、<sup>法</sup>、<sup>人</sup>  
因、<sup>つ</sup>、<sup>て</sup>、<sup>い</sup>、<sup>の</sup>、<sup>い</sup>、<sup>て</sup>、<sup>白</sup>、<sup>く</sup>、<sup>法</sup>、<sup>合</sup>、<sup>斗</sup>、<sup>し</sup>、<sup>く</sup>、<sup>白</sup>、<sup>く</sup>、<sup>つ</sup>、<sup>い</sup>、<sup>や</sup>  
こ、<sup>し</sup>、<sup>は</sup>、<sup>亦</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>や</sup>、<sup>傷</sup>、<sup>ず</sup>、<sup>も</sup>、<sup>よ</sup>、<sup>し</sup>、<sup>こ</sup>、<sup>い</sup>、<sup>い</sup>、<sup>る</sup>

走、<sup>り</sup>、<sup>て</sup>、<sup>ん</sup>、<sup>の</sup>、<sup>中</sup>、<sup>に</sup>、<sup>療</sup>、<sup>養</sup>、<sup>の</sup>、<sup>法</sup>、<sup>所</sup>、<sup>を</sup>、<sup>法</sup>、<sup>律</sup>、<sup>が</sup>  
蘇、<sup>鎮</sup>、<sup>城</sup>、<sup>で</sup>、<sup>入</sup>、<sup>越</sup>、<sup>し</sup>、<sup>て</sup>、<sup>る</sup>、<sup>兵</sup>、<sup>衛</sup>、<sup>中</sup>、<sup>小</sup>、<sup>老</sup>、<sup>婦</sup>、<sup>の</sup>  
三、<sup>名</sup>、<sup>を</sup>、<sup>考</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>て</sup>、<sup>ん</sup>、<sup>が</sup>、<sup>て</sup>、<sup>い</sup>、<sup>つ</sup>、<sup>ち</sup>、<sup>の</sup>、<sup>い</sup>、<sup>ふ</sup>  
は、<sup>と</sup>、<sup>し</sup>、<sup>も</sup>、<sup>古</sup>、<sup>法</sup>、<sup>法</sup>、<sup>也</sup>、<sup>い</sup>、<sup>つ</sup>、<sup>く</sup>、<sup>お</sup>、<sup>し</sup>、<sup>て</sup>、<sup>の</sup>、<sup>一</sup>、<sup>人</sup>、<sup>小</sup>  
か、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>る</sup>、<sup>所</sup>、<sup>を</sup>、<sup>大</sup>、<sup>名</sup>、<sup>と</sup>、<sup>言</sup>、<sup>ふ</sup>、<sup>所</sup>、<sup>を</sup>、<sup>ね</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>ば</sup>、<sup>傷</sup>、<sup>ん</sup>、<sup>だ</sup>  
追、<sup>拂</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>る</sup>、<sup>生</sup>、<sup>ま</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>中</sup>、<sup>に</sup>、<sup>あ</sup>、<sup>る</sup>、<sup>人</sup>、<sup>の</sup>  
後、<sup>世</sup>、<sup>の</sup>、<sup>み</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>礼</sup>、<sup>を</sup>、<sup>な</sup>、<sup>す</sup>、<sup>所</sup>、<sup>を</sup>、<sup>い</sup>、<sup>は</sup>、<sup>ら</sup>、<sup>し</sup>、<sup>る</sup>、<sup>少</sup>、<sup>量</sup>

の道にたつたは才出本あり優くしてその  
道流斗うして日と書りかゝる病根と追出  
まへ中しからるるまじくけの病根成り  
死ふもいふまじく二十年や二十年の同有  
へしと内ふ物鶏豚  
のまじく女たどれは小病人たるを  
小はてびし物たるまの二とすもちり之

世をたは  
下田君館 重んずる美らせしむる

よの湯小海女一は中人つた布の中

吉益東因 山脇東洋 などの方細く攻殺の刑とわ

いづれものもゆきしはたの道

しるくはるるごとく死なれて

后宮教、神内湯と或は豊原の胡

銭たなどのやうに別高し出きて



大病とてぐくぢいさういえのやうなれ  
神別席小なる事とゆゑん夏は思ひ  
祢の夏もさうさう記に

夏さうく  
汗も佛

Kitasato Memorial Medical Library